〔千葉医学　71：329，1995〕

〔編集後記〕

1994年3月28日付の「ニューズウィーク」（国際版）に大変ショッキングな記事が載っていた。まず，私の注意をひいたのはその表紙であった。大きな文字で「抗生物質—奇跡の薬は，もはや終わりか？」と書かれており，表紙一杯に並んだ抗生物質のカプセルが入ったボトルには，「ご注意：この薬はもう殺し屋細菌には無効です。」と書かれたラベルが貼ってあった。何事かと思い，早速，中の記事を読みだすと，私たち細菌学者が長い間心配してきたことが，現実になってしまったことがわかった。その内容を簡単にまとめると次のように書かれていた。

「何も効かない……。

九カ月にわたり，ワシントンにある在郷軍人病院の感染症専門医は57歳の患者にひとつ，またひとつと，ありとあらゆる新しい抗生物質を試してみたが駄目であった。この患者の血中には腸球菌が増殖して，あふれていた。たまに菌が減っても，瞬く間に増殖した。菌どもは抗生物質では驚きもしなかった。

ある朝，医師は勇気を出して静かにこの患者の病室に入っていった。『もう使える抗生物質はありません。20世紀の奇跡の薬，抗生物質は菌に負けました。』数日後，この患者は亡くなった。今や細菌感染症が命にかかわる病気となり，傷は決して治らなくなって，奇跡の薬はその時代の幕を閉じた……。」

まるで SF のような内容だが，米国の最新の医療を誇る病院で実際にあった話である。かつて人類の最大の病苦であった感染症は，時として大きな都市を廃墟と化すこともあったし，結核に罹ることは死の宣告を意味した時代もあった。大病院に列をなす患者の大半は感染症に悩む人たちであった。しかし，抗生物質の発見は，かつては死に至る病であったこれらの細菌感染症を征服したという名声を獲得し，多くの人々はそれに喝采を送り，新しい時代の到来を信じた。そして，それが永遠に続くことを疑いもしなかった。それなのに，夢の時代は，本当にわずか半世紀ほどで幕を下ろすことになってしまうのか。「ニューズウィーク」のこの記事を読んだほとんどの読者はいい知れぬ不安を感じたことと思う。たしかに，ヒトと細菌の戦いは，生物間における熾烈な生存競争である。細菌といえども，宿主の生体防御機構から逃がれ，あるいは戦うために絶妙な進化をする。患者が抗生物質による無計画な治療を受けたとき，薬剤耐性菌が出現するのは事実であるし，それは避けがたい運命であったかも知れない。そして，今も世界中でひそかに新しい耐性菌が生まれつつある。抗生物質の奇跡的な有効性そのものが，その有効性ゆえに耐性菌を選択して，その奇跡的有効性を破壊しつつあるのである。そして，その耐性菌はとどまることなく拡散していく。このまま放置したのでは「魔法の弾丸」であったはずの抗生物質はまったく役立たずになるかもしれない。発展途上国でも，かつてごくありふれた抗生物質で治療可能であった細菌感染症で多くの人々が死んで行くという悲惨な状況が日常化しているという。また，米国微生物学会に参加して得た情報によると，製薬企業の多くは，巨額な資本投下によって開発した抗生物質に対して，いとも簡単に耐性菌が出現することから，投下資本に見合うだけの利潤を確保し難い状態にあり，その開発から手を引きたがっているという。先進国といえども，有効な抗生物質がひとつもなくなり，多くの医師が呆然とするのはすぐ近いのかも知れない。このような時代が来る前に，我々は何とかして，新しい発想のもとで安定した治療法を開発しなければならない。今，やっと我々の研究室も含めて，世界中で抗生物質に頼らない細菌感染症の治療方法が研究され始めた。1995年12月にアメリカ合衆国のサウスカロライナ州で開催される日米医学協力会議コレラ専門部会の総会事務局から，我々に，抗生物質を使わないコレラの新しい治療法について発表する機会を与える，という正式な招待の通知が昨日研究室に届いた。

（編集副委員長　野田公俊）